

三保通信

25.11.1

〒424-0401

(株) 三保製菓研究所
静岡市清水区中河内一五一三
☎ 054-3396-3321

古気候学者ジーナ・モーズリーの左腕だけで223カ所刺された。グリーンランドの気候変動を示す悩ましいサインが、蚊だ。摂氏18度近くまで気温が上がる。蚊の群れにも襲われる。近年グリーンランドの温暖化が進行するにつれ、蚊が急増しているのだ。

一方、今、砂漠のオアシスが失われつつある。「水がなくなると緑はすっかり失われ、砂は手ごわい敵となつて、ものすごい速さで襲ってきます」とスボイは話す。スボイによれば、オアシスの境界は毎年100メートル以上、内側に移動しているという。それでも、根っからの遊牧民族であるスボイは樂觀的だ。オアシスには自ら立ち直る力が備わっていると信じている。シリーズ「地球を抱きし

める」『ナショナルジオグラフィック日本版』より。

スボイは常々、遊牧民の文化の重要性について語る。自然の制約と砂漠の過酷な環境の範囲内で無理のない暮らしをすること、共同体で資源を分かち合うこと、何一つ無駄

花見氏

『「地球を抱きしめる」シリーズに寄せて』

モーズリーもスボイも、

にしないこと。気候変動に直面しているオアシスが復活し、生き延びるためには、こうした昔ながらの生き方が大切だというのだ。

ある日の夕方、客の一人が、残り火で温めた小さなティーポットから、慎重にお茶を注ぐ。頭上には

上弦の月が煌々と輝き、生い茂るナツメヤシのシルエツトが藍色の空に浮かび上がる。「星もあるし、火もある。私たちは地球上で一番幸運な人間です」と。オアシスは損なわれやすく、その未来は不確かだが、スボイにとつては生まれ育った土地であり、大切な居場所だ。彼は、何があってもオアシスを守り抜こうと、堅く心にきめている。「同シリーズ6月号分」より。

「星もあるし、火もある、」それを、一番幸運な、と言わせる、モーズリーもスボイもそれを「地で行っている、」人たちらしい。「星もない、火もない、地もない」なんて、地球上に、どこにもない、なぜなら、洞窟に砂漠に見つけられるのに、だからだ。見えないのは、見えなくなっているからだけではないか、。

「地球を抱きしめる」とは、何と、でもいのちの地球だから。(H)

人間にとって健康とは、

前号(弊紙9月1日号)で乾達先生(医師)は、「疾病保険でなく健康保険を」と書かれる中で、

病気になってからでは遅いのです。病気になったら医者に診てもらうパターンでなく、現在の医療にかかわっている力を、病気を未然に防ぎ健康を創りだすパワーに転換したなら、疾病の発生率をもっと低くし、今よりもっと健康な社会になるだろうと考えます。

、、、

健康にかかわる凡ての、社会、環境、衣・食・住にはじまり、息の吸い方、歩き方、運動のし方、心の持ち方まで含んだ総合的な健康学の創造をはかる時です。(院内誌『いのち』第37号より)

とありました。

そしてたまたまでしょうが、本棚で見つけたのが昭和四十八年十一月十月初版の水^{みな}上^{かみ}勉^{つとむ}作『くるま椅子の歌』(中公文庫版)という小説です。1973年ですから今から50年余り前の作品です。裏表紙(今日なら「帯」でしょうか。)に、

期待に胸をはずませて待った初産の子は、脊椎破裂という痛ましい障害を負って生まれた。この日から若い夫婦に苦悩と闘いの日々が始まった。、

作者(※水上)自らの深刻な体験を通して描く感動の異色長編小説。

とありました。

小説の本筋の話から離れて、それも最後の「解説」を書かれている松田道雄さん(※自身は小児科の開業医をしながら、多方面にわたって言論活動を展開した、という方です。)の話の内容になります。『くるま椅子の歌』は、重症の

心身障害者対策はどうすればよいかという強い主題性をもった作品である。『くるま椅子の歌』が私をうごかしたのは、作者が主題性と全人間的にかかわっているからであつた。へ主題性とは個人の尊厳や権利を回復し、身体的、精神的、社会的に本来あるべき機能水準を達成させることで、その人自身の人生を主体的に変革していくことを目指す際に用いられる表現Ⅱ「グーグル検索」

とありました。

そこで、

健康とは何か、ですが、

いのちへの強烈な執着心をレオナルドから学ぶのです。

レオナルドが挑んだのは、人間の大きさを測り、その存在が宇宙においてどのような意味を持つかを解明するということ、人類にとって最も重大な作業にはかならない。(3面上段へ)

(2面下段より) “人間の普遍的な寸法を理解したい” という意図をはっきり書いている。それはレオナルドの芸術と科学をむすびつける、その人生の象徴ともいえる探求だった。

ウォルター・アイザックソン
著・土方奈美訳『レオナルド・ダ・ヴィンチ上』(文春文庫)より。

レオナルド・ダ・ヴィンチは『モナリザ』最後の晩餐^{ばんさん}の作者である。レオナルドの解剖図(彼の場合は解剖画と言うべきか)の形態は今日も使われている。

レオナルド(1452.4.15 - 1519.5.2)は、フィレンツェ共和国のルネサンス期を代表する芸術家。

“人間の普遍的な寸法を理解したい”とはレオナルドの言い方でしようが、「人間とは、」を追究して止

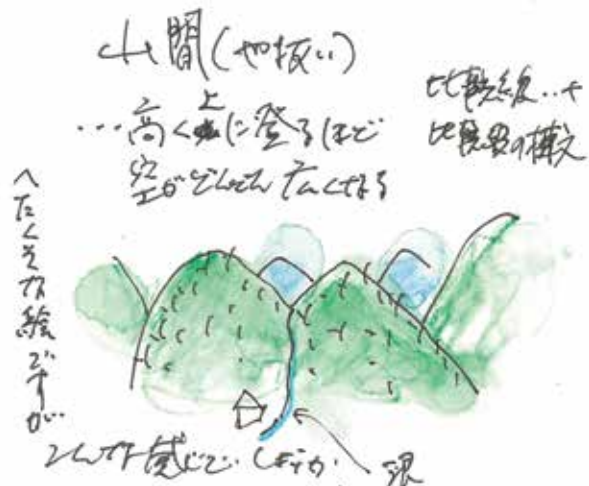
まない、この強烈な執着心こそ、天才の証といえる、と著者は書いています。

ただ人間について、それは天才だけが考えることではありません。この生を恵まれた上は誰でも考えたのです。そこで『くるま椅子の歌』です。

臺子の父親の話です。

「人頼みはだめなんだな。……きみが今日考えたことは、おれの考えにどうやら、密着してきたよ。つまり、臺子^{とうし}はおれたちが産んだんだ。……おれたちが育てなけりやらない。……どこかへ預けようとか、国家に引き取ってもらいたいなどと考えるのは、弱い考えだ。……責任をのがれることなんだ。……おれは奥美濃の土蔵の金網窓に、白い手をつかえて、おれをにらんでいた戸越の娘を見た時に、……ああ、ここに友だちがいると思った。あの座敷牢は、戸越の家の施設だった(4面上段へ)

お便りから



私が何度も、弊社所在地を“山間”と書くものですから、友人のN・A氏が「高く登るほど空は広くなる」と絵にしてくれました。

葉書に筆先よろしく、サツと描いてくれました。「高く登るほど(青山)空は広くなります」。本人、通信に転載など思っていない、でも上手だと思えます。

(H)

健康トーク

掲示板

貴通信を社頭に置かせていただきました。小生の拙文を

掲載いただき、眞に畏れ入ります。

御社近くの清流・中河内川の鮎は放流の鮎とのことで、誠に残念でございます。自然を守るということはそうそう簡単なことではないとあらためて知るような気持ちでございます。

(y・h)

前回9月1日号2pの乾達先生の院内誌「いのち」および、それをまとめたエッセイ「いのち」のお話、興味深く拝読。

『疾病保険でなく健康保険を』とのお言葉、世界に類例を見ない高齢化社会を迎えている日本では、より重要なお言葉に聞こえます。

言い換えれば「健康予防」という言葉になりましたか？

そのための啓発活動を、第一線におられた乾先生御夫妻が続けておられたことは、尊いことと存じます。

かく拝読して思うこと2つ。

1つは毎日の食生活のこと。

腸内細菌叢と疾患について関心が集まっていることは、花澤様をはじめ多くの皆様も御存知の通りかと存じます。

つい先日入手した専門誌『小児内科』の特集は錠剤微生物叢と小児疾患でした。

巻頭に「序」を執筆された先生は、小児アレルギーが御専門の大変高名な方です。それにも関わらず、小生のような無位無冠の者にまで優しくお声をおかけいただけるので恐縮しています。

その先生曰く「免疫は面白いけど難しい」そうです。

コロナ禍の前、腸内細菌の問題を取りあげた本を拝読しました。

『失われてゆく、我々の内なる細菌』M・J・ブレイザー著(みずず書房・2015年刊)。帯に、「生命科学のトレンドは脳よりも腸なのだ。」

福岡伸一(生物学者)と。

我々は、もう少し謙虚であるべきなのかと思います。

もう一つは健康のこと。

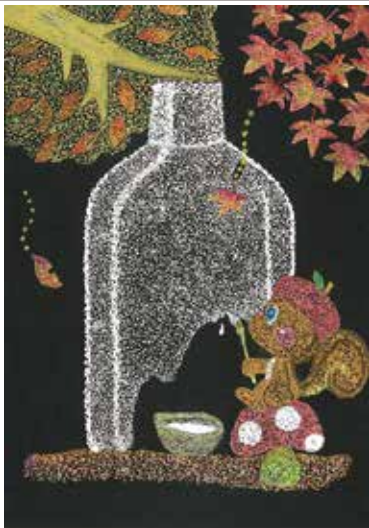
過日、公益財団法人長寿命科学振興財団の事務局の方にお会いする機会を得ました。いろいろなお話を承り、知らぬことばかりが多々あることに気づかされました。

その一つが「貢献寿命」という言葉です。

この「貢献寿命」が、今年の財団の大きなテーマの一つ(6面上段へ

ゆみゴンイラスト

。スイマグにも風情を頂いて感謝！(H)



(5面下段より)だそうです。

この概念は、東大名誉教授の秋山弘子先生が提唱されたものとのことで、「何歳になっても社会とつながり役割を持つて生きる、収入を伴う仕事に限らず、些細なことでも『ありがとう』と感謝される人生の期間」を指すと記されてあります。

とても難しいですが、挑戦する意義のあるお話にも見えます。

まだまだ学ぶことが多々あるように思う日々です。

同時に貴誌を拝読し、驚いたり、?と思つて書物を繙くこともあります。そうした学びの場をいただけることに、あらためて感謝を申し上げます。

遠くないうちに、貴地・清水を再訪したいと愚考しております。フェリーは、いろいろな問題があつて難航中とのニュースにも触れ驚いております。

我が家から見える

浅間山です。

Y・Mさんから、浅間山の写真と共にお手紙を頂戴しました。



「キャッチ
フリーズに
『さわやか
信州!!』と
言います
が、その言
葉が通用し
なくなりま
した。」と。

何のことかな、と思いましたが、「浅間山に雪が掛かっている時期はもつと近くに見えます。富士山も浅間山も雪が掛かっている方が私は好きです。」と仰つて、お手紙の消印が9・17とありましたので、この時期には浅間山に雪があつたんだ、と想像したのです。

(H)

田んぼは黄色く一色で稲刈りも始まる時期ですが暑さが続いて居ります。

田畑の仕事も夏仕度で日は外へでるのも『じつと待つて』と言う感じですが朝夕は少しづつですが涼しさを感じ虫の声が聞こえます。

この頃は朝明けるのが遅くなつて来ましたがキジの声と共に目覚めてそれから少し間外の仕事をすませます。キジも元気で毎日我家の近く迄来てくれるのでそつと見守つています。

(Y・M)

「爽やか」という言葉が、信州≪長野県≫の清々しい自然や高原のイメージと結びついて使われる、とグーグル検索にありました。」

あとがき

田舎にありながら、お客様からいただく絵葉書や写真に、広い世界を感じさせていただいております。(Y)